

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成28年6月1日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学研究科

職 名・学 年 博士課程4年

氏 名 錦 織 達 人

助 成 の 種 類	平成28年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成	
研 究 集 会 名	2016年米国消化器病週間	
発 表 題 目	Impact of laparoscopic proximal gastrectomy for early upper gastric cancer on body weight loss and quality of life: retrospective comparison with laparoscopic total gastrectomy	
開 催 場 所	米国・カリフォルニア州・サンディエゴ・Convention Center	
渡 航 期 間	平成28年5月21日 ～ 平成28年5月24日	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	250,000円
	使用した助成金額	250,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	宿泊費(一部) 105,100円
		航空券(一部) 150,000円
学会参加費(一部) 44,900円		
当財団の助成について	この度は、貴重な機会をいただき、心より御礼を申し上げます。貴財団の助成は、費用の補助がない学生等の国際学会参加に大変有意義であると思います。本学会参加で得た知識をもとに、より研究を発展させ、還元できるように努力して参ります。今後も、貴財団の助成で多くの若手研究者が海外で発表する機会を得ることを祈念しております。	

【参加学会】2016 年米国消化器病週間/DDW (Digestive Disease Week) 2016

【学会の概要】 DDW は、米国肝臓病学会、米国消化器病学会、米国消化器内視鏡学会、消化器外科学会の 4 学会より構成され、米国以外にアジア、ヨーロッパからの参加者も含めて 1 万 5000 人以上という多数の医療関係者が集まる消化器関連としては世界最大規模の学会である。そして参加者の約半数は、米国外からの参加者であり、国際色豊かな学会である。

【発表内容】京都大学消化管外科では、2/3 以上の残胃が温存可能な StageI 胃癌に対して逆流防止機構を伴う腹腔鏡下噴門側胃切除術(LPG)を施行している。本術式の有効性を検証することを目的に、術後合併症発生割合、体重減少率、術後症状と QOL を腹腔鏡下胃全摘術(LTG)と比較する過去基点コホート研究を実施した。2005 年 8 月から 2014 年 6 月に U 領域の臨床病期 StageI 初発胃癌に対して施行した LPG 21 例、LTG 44 例を対象とした。Clavien-Dindo 分類 GradeII 以上の合併症の発生割合は LTG 20% vs LPG 14%であった(P=0.55)。術後 1 年目の体重減少率はそれぞれ -9.8 vs. -14.7%であり、BMI と喫煙歴の影響を多変量解析で調整した結果、LPG は $\beta = 7.35$, $P = 0.002$ と、有意に体重減少を抑制したことが明らかになった。術後 1 年以上経過した患者を対象とした質問紙調査 (PGSAS-47 を使用) において、LPG は下痢サブスケール(P=0.016)、症状に対する不満度(P=0.022)に関して LTG と比較して有意に良好であった。以上より、逆流防止機構を伴う LPG は、LTG と比較して術後の体重減少を抑制し、術後 QOL に優れる術式であると結論した。印象的な聴衆の質問としては、ラーニングカーブとコストに関するものがあつた。合併症の管理や再入院に要する医療費やそれを減少させるラーニングカーブは、本研究の対象外であり、明確に質問には答えることが出来なかつた。将来の研究に発展させていきたいと感じた。

【学会の様子】 DDW では 6 時半から 17 時半まで消化器に関連する様々なセッションが開催される。ブレックファーストセッションでは、エキスパートから講義と参加者によるディスカッションが少人数で行われていた。「術後膵液瘻・胆汁瘻の管理」のセッションでは、術中のインフォメーションドレーンの留置や術後管理だけではなく、リサーチを行う上での膵液瘻の定義に多くの時間が割かれていたのが印象的であつた。モーニングセッションの後は、炎症性腸疾患や肝炎といった消化器内科関連を中心に講義、パネル、Quick shot などのセッションが続く。米国消化器外科学会のプレジデントから、外科医の burn out についての発表があつた。40%の外科医が burn out の状態にあり、30%がうつ症状を呈しているとのことであつた。半数の外科医は、自分の子供には外科医になることを勧めないというのは、待遇が良好な米国においての結果としては意外なものであつた。他にも、政策やシステムに関するセッションが多く開催されていた。例えば高難度な手術を一部の病院に集約化する是非については、集約化による死亡率の減少や患者の移動距離といった様々な視点から発表がなされていた。米国特有の問題として、アラスカのような極端に人口が少ない地方の集約化の困難さが挙げられていた。

また、直腸癌に対するロボット手術のセッションでは、手技自体の発表ではなく、ラーニングカーブを短くする教育方法、高価な他分野の手術と比較した費用対効果研究、また現在の問題点からの新しい手術ロボットの開発といった、疫学・トランスレーションリサーチの視点に立った発表が多くなされていたことは印象的であった。国際色が豊かな本学会では、**International program** がいくつか開催されていた。各国の外科レジデンシー・フェロー教育を比較するセッションでは、ブラジルやインドにおける手術やその教育の現状を知ることができた。ランチョンセミナーは、**Meet-the-professor** 形式で行われていた。「大腸癌閉塞に対するステント」セッションではエキスパートが経験した実際の症例を提示し、ステントと他治療方法との比較を参加者とともに議論した。ポスターセッションでは、2時間に渡って参加者とのディスカッションが行われる。ポスターツアーに参加すれば、専門家からの説明と同行者による少人数のディスカッションを経験できる。米国で盛んな肥満治療に関するセッションに参加し、最新の研究成果を学ぶことができた。日本国内からも、内視鏡医への **E-Learning System** のランダム化比較試験、大腸癌閉塞に対するステント治療に関するコホート研究といった多施設共同研究の結果が報告されており、本邦における消化器関連の動向も多く学ぶことができた。また、本学会に参加したことで、**cost-effectiveness research** や **SEER・ACS-NSQIP** といった大規模データベースを利用した疫学研究についても多く学ぶことが出来た。

不勉強ながら、本学会に参加して **Financial Toxicity**、**System based practice** という言葉を初めて耳にすることが出来た。国内の主要学会では、**Public Health** や病院管理を議論するセッションは多くはないと思われるが、少子高齢化が進み、財政面への配慮がより必要となる本邦においても、こうした視点からの発表は今後、より重要性を増していくように思う。今後の自身の研究にも、本学会参加で得た知見を活かしていきたいと思う。

【謝辞】貴重な機会を与えて下さった京都大学教育研究振興財団のご厚意に深く御礼を申し上げます、貴財団の益々のご発展をお祈り申し上げます。